

---

IS <インフィニット・ストラトス> ~禁書目録の転生者~

悠梨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS <インフィニット・ストラトス> ~禁書目録の転生者~

### 【Nコード】

N4704Y

### 【作者名】

悠梨

### 【あらすじ】

女の子をかばってトラックにひかれて死んじゃった私・朱美 夜宵。

目を開けてみれば真っ白な空間：じゃなくて私の部屋！？ しかも助けた女の子は実は神様！？ 神様の恩返しによってIS <インフィニット・ストラトス>の世界に転生した私。でも何故だか知らないけど渡されたのはチートのかわりに「とある魔術の禁書目録」のインデックスの容姿に完全記憶能力、『歩く教会』、そして『自動書記』！……って、十分チートじゃん！

## プロローグ（前書き）

もうひとつの作品の息抜きとして書くつもりです。  
更新停止したらごめんなさい！

## プロローグ

キキイーンッ！

甲高いブレーキの音が耳をつく。

悲鳴を上げる野次馬の声もどこか水を通して聞いているようだ。

あ、目が霞んできた。

「……ああ、せめて『とある魔術の禁書目録』の新巻、読みたかったな。」

頭の隅でどうでもいいことをぼんやりと考える。

そして何故こうなったのかをぼんやりと考えた。

ことの始まりは学校から帰ったことからだ。

キーンコーン、カーンコーン、とチャイムの音が響く。

その音に混じってざあざあと雨が降り注いでいる。

やっと学校が終わった。

私——明美　夜宵はカバンを持ちながら黒板の日付を見る。

「あ」

今日はあの本が出る日だ。帰りに本を買って帰ろう。

そう思いつつ学校から出ると、やはり変わらず雨が降っている。

折り畳み傘を開いて肩で支えると、濡れないようにカバンを抱えて本屋へと向かう道のりをたどる。

人ごみの合間をぬって出来るだけ急いで本屋へと向かう。

（あの本屋は意外に人気だから……）

新巻はあっと言う間に売れてしまう。

足を進めていると信号に引っ掛かってしまった。

バシャンツと水溜まりの水を飛び散らしながら目の前を車が通りす

ぎる。

びしょびしょになったスカートを見てため息をついてから顔を上げる――。

道路に棒立ちになった、幼い一年生くらいの少女。

その前に迫る、トラック。

肩にかかるくらいの特徴的な茶色の髪が、ふわりと風圧で揺れた。

――とる行動など、一つしかなかった。

彼女のいるところまで、全力で走る。

悔いたことのない自分の足の遅さが、今はただただ恨めしい。

細い体をあらん限りの力で突き飛ばすと、

目の前にはトラックがあった。

眩しい。

目を開けて最初にそう思った。

しかし、目が慣れてみるとそこは私の部屋だった。

だが、違和感しか感じない。

と言うのも、私は死んだはずだ。

トラックに踏み潰される感触も（もう二度と体験したくない）覚えている。

それに――、

目の前に私が助けた茶髪の女の子がいた。

「ごめんなさい！」

「.....、は？」

思わず間拔けな声を出してしまった。

「ごめんなさい！ 本当にごめんなさい！」

「あのー、ちょっと説明希望」

ぺこぺこ頭を下げて、今にも土下座しそうな女の子に状況を説明

してもらおう。

「えつとですね、私は神様なんです!」

「.....、」

今なんて言った?

私は神様なんです神様なんです神様なんです神.....、

.....はっ!

「もしかして、あれ?」

「あれってなんですか?」

「あれなの? 二次創作とかでよくある『間違えてアナタ殺しちゃったから転生させてアゲルヨ』って言うやつ?」

「は、はい、そうです!」

はあ、そうなんだ。

すう.....と息を吸って、

「ふざけんなー.....っ!」

「ひ、ひいつ!?!」

そんな人の生死をミスで変えるんじゃないよ! どれ、一発ぶん殴  
っ.....

「ご、ごめんなさい!」

女の子ー神様が涙目で見上げてきた。

無理! こんな可愛い神様を殴れるハズがない!

あまりの可愛さにぶるぶると震えていると、

「お、怒ってます...よね?」

「怒ってない怒ってない」

手を振って怒っていないことをアピールする。

「よかった!」

神様はぱつと笑顔を見せてくれた。

ああ、お母様、夜宵は同性愛に目覚めそうです!

「それで、本題なんですけど、あなたの言ったとおりに転生するこ  
とになります」

「ふむふむ」

「転生先は『IS <インフィニット・ストラトス>』になりま  
す」

「待ったあ!」

ここでストップをかける。なぜかと言うと、

「『IS <インフィニット・ストラトス>』って、何!？」

「ええっ!? し、知らないんですかあ!？」

神様がびっくりして言う。びっくりする仕草まで可愛いなんて……。

「……ま、まあ、知らない物語の中に転生するのも楽しいと思いま  
すよ?」

ええ……。

「嫌ですか?」

ヤメテ! そんな悲しそうな顔をしてこっちを見ないで!

「分かった分かった、そこでいいよ」

泣きそうになつた神様に慌てて言う。

「それで、特典なんですが……」

「やっぱり、『とある魔術の禁書目録』の一方通行(ベクトル操作)  
が……」

「ごめんなさい。無理なんです」

「な、なななな何で!？」

「……私は下級の神なので難しいものはダメなんです……」

ヤメテ! そんな悲しそうな顔で(以下略)。

「じ、じゃあ柿根帝督(未元物質)は」

「無理です」

「じじじじゃあ、御坂美琴(超電磁砲)は」

「無理です」

「……インデックス(完全記憶能力)は」

「いいですよ」

「いいの!？」

食いついた私に神様は、

「オマケとして10万3000冊の魔導書と、『歩く教会』と『自

ハネのペン

動書記』をつけてあげます」

「やったー！ って『自動書記』？！」

喜びつつもギョツとする私。

「『自動書記』は自分の意思で作動できますよー」

「よかったー」

ほっと一息つく私。

「それでは、行ってきてくださいー」

「あ、ちよ、待った！」

「？ 何ですか？」

「できればいいんだけど、その…『IS <インフィニット・

ストラトス>』の原作開始まで時間を飛ばしてくれない？」

「いいですよ」

やったー！ 羞恥プレイを回避できた！

「独り暮らしと言っことにしておきますね」

「はーい。あ、そうだ！」

閃いた私を怪訝そうに見る神様。

「名前を教えて！ それから携帯で話せるようにしてくれない？」

「…？ あっ！」

一瞬きよんとした神様だったが、私の言葉の内容を理解すると同時にぱつと笑みを浮かべた。

「了解です！ 私の名前はリンです！」

「リン…いい名前だね！」

私がそう誉めると、桃色の頬を赤く染めて、

「それでは行って来てください！」

リンの元気な声と同時にパカッと足元に穴が空く。

「貴女の二度目の生に、幸在らんことをーーーーーーーー」

その言葉が聞こえて、私の意識は闇に堕ちた。

「まさか、あんなことを言ってくれるなんて……」

私ーリーンは嬉しげに、

「あの人、天然なのかしら……？」

そつと呟いた。

## ブローグ（後書き）

ブ、ブローグ長ー！？

な、なんかやたらと長くなったー！？

## 主人公紹介・用語紹介（前書き）

まさかの連続投稿です！

ちなみにここは話が進むたびに編集されます。ネタバレが嫌な人はブラウザバックの方がいいと思います。

## 主人公紹介・用語紹介

名前

インデックス（前世は明美夜宵）

容姿

『とある魔術の禁書目録』のインデックス。  
銀髪に翠の目、白い肌に小柄で華奢な体格とかなり可愛い。  
服は常に『歩く教会（修道服）』。

所属

イギリス聖教 第零聖堂区「必要悪の教会」  
ネセザリウス

職業

シスター及び魔術師・魔道書図書館。

IS学園に入ってからシスター、及び学生。

魔法名

現在不明。

性格

原作のインデックスと非常によく似た性格。

天真爛漫かつ若干わがままな性格で、子供っぽい言動が目立つ。

普段はシスターらしからぬ振る舞い（もともとシスターではなかったため）が多いが、絶望的な状況でも「祈りは届く」として決して諦めないなど、篤い信仰心や深い慈愛の精神も見せる。インデックス補正なのか口調の最後に「〜かも」や「〜なんだよ」がつく。

しかし、少々黒い所があり、キレると口調が「〜かも」ではなくなる。

とにかく平穩はなくなってもいいから賑やかさを好む。

## 食欲

外見に似合わず非常に食欲旺盛かつ大食いで、腹を空かせて食事をねだることが多い。反面、空腹がいつまでも満たされないでいると機嫌が悪くなる。シスターなので本来嗜好品や食欲への執着は禁じられているが、本人は修行中だから仕方ないとして後ろめたさを感じつつも誘惑を断てずにいる。好き嫌いは特に無くとにかくよく食べ、数人前の量を一気に食べ尽くし周囲の人間を呆れさせる事もよくある。

## 経歴

女の子に扮してトラックにひかれそうになった神様リインを助けて死亡。

その後神様リインに転生させてもらった。

神様とは携帯で会話できる。

チートのかわりに『とある魔術の禁書目録』のインデックスの容姿に能力をもらった。

能力については後述。

## 出身地

ロンドン。

## 国籍

前世の国籍は日本だったが、転生したためイギリスになった。

## 知能

非常に優秀な頭脳を發揮し、それに関連して文学や語学方面の知識

も豊富。非常に本好きで漫画や絵本でも目の色を輝かせて読み耽り、数十ヶ国もの言葉を喋れるほか未開の文化圏の言語すら習得できる程。

原作のインデックスは科学に関してまったくダメだったが、今作品のインデックス（夜宵）は科学に関しても詳しい。

能力

能力1

完全記憶能力

完全記憶能力は一瞬見たものでも二度と忘れない。つまりどんなに分厚い資料だろうが一度読めば完璧に一言一句違わず暗唱できる。

能力2

『10万3000冊の魔導書』

10万3000冊の魔導書を記憶している「魔道書図書館」を担っている。それらは常人が一目見たら発狂するほど危険な「原典」である一方で、世界の常識レベルを変え、手に入れた者を「魔神」にするほどの価値があり、それ故にその身を魔術師に狙われることも多い。彼女が魔道書の汚染の影響を受けない理由は、一歩間違えば人間としての基本性能すら失うレベルの精神調整を何十回も繰り返し、大量の防御機構（宗教防壁）を格納しているためらしい。それによる知識から魔術を逆算し、対抗策を作り出す。今作品ではインデックス（夜宵）は科学をかじっているため科学により立証された弱点を徹底的に攻める魔術を作り出すために使われる。

能力3

『自動書記』  
ヨハネのペン

能力2の『10万3000冊の魔導書』により作り出された魔術を使うための能力。

瞳には赤い魔法陣が浮かび上がり冷徹かつ無機質な擬似人格が表出

し、無表情と機械的な言動で必要な措置を実行する。喋り方も淡々とした口調に変化し、特に非常時や魔術行使の際には「第 章第 x x 節。 - 」といった書物の記述の引用のような語句を頭に付けた話し方となるのが特徴。

発動中は本人の意思はあるものの、“中？から見ていただけとなる。人形のような喋り方・表情になるため、初見の人はだいたい怯む。

『とある魔術の禁書目録』とは異なり自分の意思で起動することができる。

「神よ、何故私を見捨てたのですか（エリ・エリ・レマ・サバクタ二）」、「北欧神話の伝承を再現した「豊穡神の剣」、様々な攻撃を可能とする血のように「赤い翼」を背から生やすなど、多種多様で強力な魔術を発動する。

#### 通常装備

##### 『歩く教会』

服の形をしており、フードと修道服がわかれている。

この『歩く教会』は教会としての最低限の設備が整えられた名前のとおりまさに“歩く？教会であり、結界である。「服の形をした教会」と称され、どのような攻撃も無効化する法王級の結界を持つ霊装。インデックスの身を守ると同時にその存在を探知させないという効果もある。

この防御は包丁で刺されたくらいではびくともせず、『白式』の『雪片式型』をも防ぐことができる。

ただ服の形をしているため、脱いでしまうと意味がない。

ちなみにドラ もんの四次元ポケットのようにものをたくさん入れることができる。

#### 通常武装

##### 『七天七刀』

神裂火織のものを借りている。黒鞘に納められた2メートルほどの日本刀。

おまけとして銅系ワイヤがついており、その銅系は絶対にちぎれない。銅系は細く、水にぬれたりしない限り全く見えない。

IS

『夜宵』

インデックスのIS。第3世代型IS……なのだが、インデックスたち科学に詳しい魔術師によって改造（改良）されたため、見た目以外はスペックが信じられないほどに高いぶっ飛んだことになっている。

「七天七刀」（コピー）

神裂火織の「七天七刀」をそっくりそのままコピーしたもの。しかし、オリジナル（本物）とは異なり、黒ではなく銀。銅系もコピーされている。

『七閃』

銅系によって繰り出される七つの連激。

一瞬にして七回地面または相手を切り裂くことができる。

『唯閃』

『七閃』と違って全く手加減ができず、本当に強い相手にしか使わない。

抜刀術の構えから一閃して相手を切り裂く。

## 用語紹介

### 魔術

呪文や儀式によって超常現象を発生させる技術・理論の総称であり、いわゆる魔法・魔術。

一口に魔術といってもその効果は様々で、攻撃的な魔術から防御や治療・移動や通信などの補助的な魔術まで多岐に渡る。また、多種多様な種別や系統が存在し、近代西洋魔術、ルーン魔術、錬金術、陰陽道、カバラなどの魔術理論から、所属する宗教や神話の理論に沿った物まで、術者によって異なる。目的さえ定めれば自分の望むような異能をセッティングする事も出来るため、非常に自由度・万能性が高く便利な力である。

天界などのこの世とは違う別位相空間の異世界における法則をこの世に適用する事によって、通常の物理法則を超越した現象が発生するという原理であるという。手順としては、まず初めに魔力を精製し、その魔力を任意の形で操作するコマンドとして記号を示したり儀式を行う事で術式が組み立てられ、魔術が発動する。なお、魔力運用のコマンドは既存の宗教的法則や伝承を応用して組み立てるのが最も効率的とされる。魔術は厳格に体系づけられた学問でもあるので適当に行っても使えず、法則を無視したデタラメな現象も起こせないが、必要な知識を学んで正しい手順を踏めば素人でも使える。ただし、宗教防壁を備えていない（宗教に疎い）者が頻繁に使用すると脳がショートする恐れがある。便利で有用だがその反面危険性もあり、軍事機密や兵器技術のような側面もあるので秘匿され、一般には普及していない。

## 魔力

術者の生命力を変換・精製して生み出す力であり、魔術行使の際のエネルギー源。「生命力という原油を、流派や宗派という製油所を使って精製したガソリンのようなもの」と例えられる。精製方法を変えればガソリンではなく重油や軽油が出来るように、同じ人間の生命力を使っても練り方や宗派を変えれば力の質やパターンが大きく変わる。原則的に全ての魔術は魔力を消費して発動される。地脈・龍脈や天使の力といった外部のエネルギーを用いる魔術についても呼び込む際に魔力を使うため、魔術には術者の魔力が必要不可欠である。

## 魔術師

魔術を行使する人間の総称。いわゆる魔法使い・魔術師。使用する術式や所属する宗派・組織などによって千差万別だが、19世紀末に確立した「近代魔術師」アドバンスウィザードの傾向として個人主義が強く、組織の利害や金銭的な契約よりも私情や信念を重視する者が多い。また、特に魔道書を執筆しその内容を広めたり弟子に魔術を教えたりする者を「魔導師」と呼ぶ。

## 魔法名 (ラテン単語 + 数字3桁)

近代魔術師の慣習。自分の魂に刻み付けた大切な願いや信念の象徴を通り名として名乗っており、これを名乗るのは自らの覚悟の程を宣言するに等しい。戦闘に重点を置く魔術師にとっては「殺し名」ともされ、相手が魔法名を名乗る時は名乗り返さなければ失礼にあたる。後に続く数字は同じ名前が重複した時のためのもの。

## 魔道書

魔術の使用方法（異世界の法則）が記された書物。毒の純度を薄め効力の弱まった「偽書」や「写本」と、毒が強く強大な力を秘めた「原典（げんてん、オリジン）」がある。なお、作中に登場する魔道書は名称としては実在する。知識を広めることを目的として書かれているが、魔道書に記された異世界の知識はこの世にとって猛毒であり、常人が目を通すと脳を汚染されて発狂もしくは廃人になる。並みの魔術師でも原典を読み解くのは難しく、魔道書の毒に耐えられる技量や特性を持つ人間は稀である。原典クラスともなると文字や文章など本そのものが高度な自動魔法陣と化し、地脈など自然に存在する力を収集・増幅させ動力源として半永久的に自律稼動する。自己防衛機能によって破壊や干渉を受け付けず、たとえ破壊できたとしても力ある原典ならすぐ再生してしまう。逆に中途半端な魔道書は暴走したり自壊してしまう。リスクは伴うものの強大な魔術を得る事ができ、また単に読んで使うだけではなく所持するだけでも自動機能を利用した魔術行使が可能となる。自身の知識を広める者に協力する性質を持ち、それを妨害する者はたとえ所有者や使い手であっても攻撃する。

## イギリス聖教

イギリス・ロンドンに拠点を置く十字教の一派。イギリスの国教。英国三派閥の清教徒と同義。建前上のトップはイギリス女王のエリザベス二世だが、実質的には最大主教のローラースチュアート。現実世界の英国国教会に相当する。

本拠はロンドンの聖ジョージ大聖堂（建前はカンタベリー寺院）。魔女狩りや異端審問といった対魔術師の分野に特化しており、その実働部隊として「必要悪の教会<sup>ネセサリーズ</sup>」を有する。

必要悪の教会ネセサリウス  
だいせろせいどつく

イギリス清教第零聖堂区。魔術関連の事件捜査や、魔術師・魔術結社の殲滅・処分を任務とする組織であり、対魔術専門国際治安維持機関である。設立当初は一部署に過ぎなかったが、現在ではイギリス清教、ひいては英国三大勢力としての清教派の実質的な権限を握っている。対魔術を司る部署だが、魔術に対抗するために構成員達は魔術に長けており、その名の通り魔術という穢れを一手に担い毒を以って毒を制する必要悪として存在している。また、戦闘要員は完全実力制であり、十字教とは関係しない魔術師も在籍する。なお、構成員は公務員と同等の安定収入が得られる（その給料は国民の血税から賄われている）。

## 主人公紹介・用語紹介（後書き）

うん…、今更ながら主人公最強？

part 1 (前書き)

あー……。

インデックスさんのESどっしょよっしょ。

「…知らない…知ってる天井だ」

私 夜宵ことインデックスは最初に呟いた。

軽く腕を上げてみれば、どこかで見たような修道服。

『歩く教会』だ。

ちなみに冒頭で言葉を言い換えたのはなぜかと言うと、生まれてからこれまでにはカットされているだけで実際には経験している。

つまり、皮をむいた後のリングを見て、皮はどんなものだったかをしりたければむいた皮をみればいいのだ。

という事で思い出してみると。

凄く凄い。いつ何を食べたかまできっちり覚えていたのだ。って、

この人……！

新幹線もビックリな速度でベッドから飛び降り（ベッドが凄く大きかった）向こうのテーブルに置いてある携帯を掴む。

「もしもし！？ リンさん！？」

『はい、何でしょうか？』

「なんだって『必要悪の教会』があるの！？」

『必要悪の教会』。

『とある魔術の禁書目録』に出てくる、インデックスが所属している教会だ。

『え〜つと、ですね、と言うのも今回転生した『IS インフィニット・ストラトス』なんですが、』

『これが、学園バトルハーレムものなんです』

「……は？」

本音を言うと、私はハーレムものが大っぴかっぴか嫌いだ。

これ呼んでへらへらしてる男子を見ると、とんでもなくムカつく

のである。

しかし、その前にも問題が……。

「ば、バトルもの？」

そうなのえある。バトルである。

『そうなんですよ！ バトルものなんですよ！ この話は困ったことに、ISと言う女性にしか使えない武器の使い方を学ぶIS学園と言ったところが舞台の、バトルものなんです』

え？ それならハーレム要素はな……あー。

『そうなんです、あなたの予想通り、女性にしか動かせないISをただ一人、男で動かせるやつがいたんですよ』

「はあ……」

憂鬱だ。しかし、

「そういえば私もIS学園に……」

『入りますよ！』

「ほう……。で、なんでそれと『必要悪の教会』ネセサリウスに関係が……？」

『神裂火織さん、いますよね？』

「え、もももしかして……」

『神裂さんに剣を教えてもらうためです！』

「ななな、なるほど……」

『剣の使い方、頭に入ってますよね？』

「え、うん……」

『でもちゃんと稽古はしてくださいね！』

ちゃんと念を押してから、

『神裂火織さんを作った時に、どうせなら『必要悪の教会ネセサリウスまるごと

作っちゃえ ……』という事で作っちゃいました』

そんなノリで作っちゃって大丈夫なんだろうか……？

とと、それと……と慌てて言うリイン。

『あなたは神裂さんと大の親友ですよ！』

「え、そうなの？」

『ええ！ ……ちなみに私と話す時以外はインデックスの口調になり

ますからね！ …キレた時は別ですけど。この世界の世界観はその携帯の横の紙に書いておきました！」

「え、なんで携帯じゃないの？」

『電話はお金がかかるからです！』

「神様なのにな？」

思わずつつこんでしまった私は悪くない。

『それでは、さようなら！』

ぷつつ、と電話が切れる。

「さて、どれどれ……」

テーブルの上においてあった紙を読み始める。

紙にはこんなことが書いてあった。

“女性にしか反応しない”、世界最強の兵器「インフィニット・ストラトス」、通称「IS」（アイエス）の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し、女尊男卑が当たり前になってしまった時代。織斑一夏は、自身が受ける高校の入学試験会場と間違って、IS操縦者育成学校「IS学園」の試験会場に入室。そこにあったISを、“男”でありながら起動させてしまい、IS学園に入学させられてしまう。

…だそうだ。

「…典型的なハーレムものかも」

呟いて見て、インデックス口調になっていることに気付いてあれっと思う。

そういや、ラインがそんな感じのこと言ってたな。

「ん？ って、あ！」

時計を見て、はっとする。

もうすぐ入学式の時間だ。

とりあえずIS学園のことが書いてある資料を引っつかんで、慌てて家を出…かけて気がつく。

「寮に行くんだから生活するためのものがあるのかも！」

「かもじゃなくて断定なのだが、今はどうでもいい。」

再び高速移動して荷物をまとめ、『歩く教会』の中に放り込む。

あれ？ 入った！？ これはドラ もんの四次元ポケットなのか！？

と心の中でつつこみつつも、IS学園まで走り出…そうとした瞬間、

神裂火織様様が出来た。

「…乗っていきますか？」

車に乗った火織様が言う。

高速で首を縦に振る私。

「飛ばしますよ？」

「早く！」

「了解です！」

私と火織を乗せた車は凄いスピードでIS学園へと向かった。

part 1 (後書き)

なぜにこんなに長くなる…？

## part 2 (前書き)

一夏のキャラがつかめん……。  
というかこっちがメインみたいになってる……。

俺 織斑一夏は困っている。

「そ、それじゃあSHR始めますよー」  
ショートホームルーム

黒板の前で若干引きつった笑顔ながらも微笑む女性、副担任こと山田真哉先生。

慎重は低めで、生徒とあまり変わらない。しかも服はサイズが合っていないのかだぼっとしていて、ますます本人が小さく見える。かけている眼鏡もつや大きめなのか、少しずれている。

ちなみになぜ俺がこの先生の名前を知っているかと言うと、ストーリーキングしていた……わけではなく、さっき自己紹介していたからである。

断つっつじてストーリーキングしていたわけではないからな！

……はっ！？

俺は一体誰に向かって話していたんだ？ あれ？

……もう現実逃避はやめよう。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願ひしますね」

「……」  
先生のにこやかなあいさつにも全員無反応で、教室の中は変な緊張感に包まれている。

「じじじじゃあ、自己紹介をお願いしますえっと、出席番号順で」  
うるたえている副担任がかわいそうになったので俺だけでも反応してあげたいのだが、そんな余裕はない。

なぜか。制限時間はないので考えてほしい。

……。

……。

……。

正解は、

俺以外のクラスメイトは全員女子だからだ。

今日は高校の入学式。新しい生活の幕開け。非常に良いことだ。

しかし、問題はとにかくクラスに男子が俺一人だけだと言うことだ。  
(想像してはいたけど……実際はさらにキツいな……)

自意識過剰でも冗談でもなく、本当にクラスメイト全員からの視線  
(死線?)を感じる。

席も悪すぎる。なんで真ん中&最前列なんだ。めっちゃくちゃ目立つ  
じゃないか。

俺は窓側の席を見やる。

「……………」

何かしらの救いを求めての視線だったのだが、薄情なことに六年ぶりに再会した幼なじみ、篠ノ之箒はふいつと顔を窓の外にそらした。なんてやつだ。……もしかして俺、嫌われてる？

「……………くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!?!」

いきなり呼ばれて俺はびっくりして声が裏返ってしまった。

くすくすと笑い声が聞こえて、俺はますます居心地が悪くなる。

別に俺には女の子に対する苦手意識はない。が、限度というものがあるだろう。

いくらラーメン好きだって毎日ラーメンだったらさすがに飽きる。

……………多分。

ともかく、クラスで男は俺だけ。……………多分。

なぜ多分かというと二人もまだ来ていないやつがいるからだ。

一人はインなんたらとか言う奴。山田先生が、

「インデックスさーん? まだきてませんね……………」

と呟いていたからだ。

ここで居心地が悪くなっていた俺だが、このときばかりはクラスの女子と一緒に、

「目次って……………」

と呟いてしまった。

もう一人は担任。インなんたらのほうは生徒だからまだいいと思う

が、担任が遅れるって……。

どこかの誰かさんを思い出すよ。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

はっと自分の世界から戻ってくると、副担任の山田真耶先生が頭を下げていた。何度も何度も下げるので眼鏡がずり落ちそうになっている。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……って言うか自己紹介しますから先生落ち着いてください」

「ほ、本当？ 本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ。絶対ですよ！」

がばつと顔をあげ、俺の手を取って熱心に詰め寄る山田先生。あの、また凄い注目を浴びてるんですが。

しかしまあ、すると言った以上引く訳にはいかない。それになにより、最初に溝を作ると二度とこの環境には馴染めないと見た。

覚悟を決めて、後ろを振り向く。

(うつ……)

今まで背中だけに感じていた視線（死線？）が一気に俺に向けられているのを感じる。

なにせさつき薄情にも俺を見捨てた筈でさえ俺を横目で見ている。

さすがにこんな風に注視されると……。別に俺には女の尾に対する苦手意識はない。が、限度と（以下略）。

「えー…えつと、織斑一夏です、よろしくお願いします」

頭を下げて、上げる。……ちよつと待て。なんだその『もつ』という喋つてよ『まさかこれで終わりじゃないよね？』みたいな空気はなんだ。

首を冷や汗がつうつとつたう。

かちつ、と時計の分針が動いた。  
それと同時に教室内の緊張がピークに達し、俺が緊張に堪え兼ねて  
口を開きかけたその時

「……………え？」

今まで一言も喋らなかつた篤がぽつんと言った。  
みんなの注目が俺からそれる。  
見えない重圧から解放された俺が大きく息をつく。  
しかし、篤は窓の外をにらむように凝視したままだ。  
そして、俺も篤が見ているものがなんなのか、見ようとしたその瞬  
間

バリイン！ ……ドサッ！

窓が大きな白い固まりのようなものに叩き割られ、その白いものは  
ごろごろと俺の机の前まで転がってきた。  
みんながそれを見ようと立ち上がる。  
しかしそれは、モノではなかった。  
銀髪に翠の目、そして制服、ではなく修道服を来た少女。  
それを見て、俺は一言。

「シスターさん？」

「痛った〜」

私　夜宵ことインデックスは頭をさすりながら立ち上がった。

「いくら早いからって、人をぶん投げるなんて、かおりはひどいんだよ……」

と愚痴をもらしながら自分の席（とおもわれる空席）に座った。

そして隣の男子（資料によると織斑一夏）が、

「シスターさん？」

……。

まあ、合ってるね。

part 2 (後書き)

この話、じつは一回消えたんです…。  
文章が消えるって、こんなに悲しいんだ…。  
ハハハ…。

私 夜宵ことインデックスが席に座ると、教室がざわめき始めた。

ちねみに私は織斑一夏にありがとうがとうありがとうと合図を送られていた。

いったいどういう意味だろう？

「あのー……」

「どうしたんだよ？」

「自己紹介をしてるんですが、『あ』から始まって今『お』でね、インデックスさん来てなかったから飛ばしちゃったんだ。だ、だからね？ 自己紹介、してくれるかな？」

と、副担任の山田真耶先生（黒板に書いてあった）に言われて立ち上がる。

ざわめいていた教室が一瞬でしんと静まり返る。

これはキツイ……。

織斑一夏もこの量の視線を持ってってくれば感謝もするよね。

私は思わず数分前の出来事を思い出していた。

「…インデックス？」

「なあに、かおり？」

私 夜宵ことインデックスは今火織の車の中にいる。

「『七天七刀』は持っていますね？」

『七天七刀』。

神裂火織の持つ2メートルあまりの巨大な日本刀。

私 インデックスが持つには違和感がありすぎる。

しかし、記憶を探ってみるとあるわあるわ。

神裂さんのスパルタで剣道を習っていたのだ。

「持ってるよ？」

「その刀でよければ存分に使ってくださいね」

「うん！ かおり、ありがと！」

「どういたしまして」

ちなみにIS学園に行くというのは上層部が、

『ISの性能、弱点などを調べ、敵対した際魔術は聞くのかななどを調べる』

と言うことになっていた。

…まあ、実際はラインがこう言うようにしむけて、私 インデックスに仕事をまわしたただけだね！

そつえばラインに電話をもらって、

『実はこの世界にいる神裂さん達は実は「もしもインデックスが【首輪】をつけられず、記憶も失わなかったら」と言うIF？ の世界からつれてきたんだよー』  
と爆弾発言をされた。

IFの世界って本当にあるの！？ てかつれてこられるんなら上条さんにも会えたのに！

あのときはシヨックで真っ白になりました。

「インデックス？ 付きましたよ？」

「あ、本当！？ かおり、ありがとね！」

車から降りて教室に向かおうとしたが、

「インデックス！ こちらのほうが早いですよ！」

と声をかけられて振り向いた瞬間

「え？」

中を舞っていた。

「えーっと、正式名称はIndex-Librorum-Prohibitorium（禁書目録）で、呼び名は略称のインデックスでいいんだよ！ 所属はイギリス清教 第零聖堂区「必要悪の教会」ネセサリーウスで職業はシスターなんだよ！」

「……………」  
あ、あれ？ ミスった？ でもやっぱりシスターだから嘘はダメだよね。

「……………」 はあ！？  
あれ？ どうしたの？

## part3 (後書き)

インデックスの正式名称が長い…。

## part 4 (前書き)

出席簿先生、初登場！  
微妙に戦闘シーンあります。

「……………」

静かだ。

私、夜宵ことインデックスはそう思った。

沈黙が痛い。

一人、女子が手を挙げた。

「あのく、どうしたんですか？」

山田真哉先生がその女子に声をかけた。

「インデックスさん？ 聞きたいことがあるの」

「なにかな？」

こてんと首を傾げる。

教室の端っこで、「あの子かわいいく」「萌えく！」「とか叫んでいる人たちは無視しよう。うん、きっと突っ込んだじゃいけないとこなんだ。

「とりあえず、イギリス聖教って何？ それから、インデックスって偽名なの？ それから何で制服着てないの？」

「まってまって、一個ずつ答えるから待って欲しいんだよ！」

慌てて手を出していったん質問をストップさせようとした時、バンツツ！

と教室のドアが開けられた。

ふっ、と気配を感じてとっさに横に飛ぶ。

と、一瞬後、今まで私の頭があったところをスカっ、と出席簿が通っていった。

「ふむ、やるな」

声がして出席簿の主を見ると、

黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身。鍛えられてはいるが決して過肉厚ではないボディライン。くんだ腕に、オオカミを思わせる鋭い吊り目。

「げえつ、関羽!?!」

「バァンッ!」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿たれ」

叩かれたのは織斑一夏だった。

「それから、貴様も」

ぶん、と振られた出席簿をよけるために通路を後ろに飛び退る。

え、よける時機にあたらなかったかだなんて?

あたるわけないじゃーん。

ごめんなさい、調子乗りました。

「貴様、制服は?」

「貴様じゃなくてインデックスなんだよ!」

「ちゃんと答える! ついでにインデックスってどう考えても偽名  
だろうが!」

「偽名じゃないもん! ちゃんと本名だもん!」

「だから制服はどうした!?!」

「あんなに着心地の悪い変な服なんか着たくないもん!」

「お前の服の方が変だ!」

「この服は『歩く協会』と言って正式な修道服なの!」  
なんだか口喧嘩になった。

ヒュッ、とまた出席簿が飛ぶ。

「ごめんなんだよ!」

先にポニーテールの女子に謝ってから、その机を持ち上げて、出席  
簿を受け止めた。

ワオ、受け止めた机がみしっていった。

まともに受けてたら頭蓋骨陥没してたかも。

それにしても、インデックスって意外に力持ちなんだねえ。  
とと、あ、また出席簿を振り上げてる。

ぽん、と机を放り出し、近くの机に飛び乗って、跳躍する。

ちよつと担任の真後ろに回って、

「覚悟!」

と言って頭に噛み付いた。

つもりだった。

「…およ?」

悲しいかな、身長之差というものがあり、私は担任に首をつかまれ、猫のような体制になっていたのだった。

ああ、神よなぜ私を見捨てたのですか（レマ・レマ・サバクタニ）いゝ。

「早く離すんだよ!」

…はい、状況確認。

? 担任っぽい女に叩かれそうになる。

? かわして反撃。

? 首を掴まれ、ぶら下げられた猫のような体制になる。

? 冒頭の言葉。

…はい、以上、私、夜宵ことインデックスの状況確認でした。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「私を無視したまま会話しないで欲しいんだよ!」

じたじたと暴れるものの、全く手の力は緩まない。

「うるさい、静かにしろ」

Bannon!

といい音が響くものの、さすがは『歩く教会』。

全く痛くない。

ビバ、『歩く教会』!

「い、いえっ。副担任ですからこれくらいはしないと…」

さっきの涙声はどこへ!? と小声で突っ込んでいる織斑一夏は放

つておいて、本題。

「首が絞まって苦しいんだよ! さっさと下ろすんだね!」

しゃーっと威嚇しながら担任の足を蹴る。

じたばたと暴れていると担任が離してくれた。

が、離すというより落とす。

「みぎやっ!？」

ついつい猫のような悲鳴を上げてしまった。

したたかに打ち付けたお尻をさすりながらじとじとした目でにらみ

つけるが完全無視。

「諸君私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者にするのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。できないものにはできるまで指導してやる」

「指導じゃなくて調教じゃ……」  
「 Bannon! 」

さつき出席簿で叩かれた（痛くなかったけどね!）ことの私のささやかな反撃は出席簿アタックによってあっさりと返された。

「私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。讚良ってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんとこの暴力発言。職務の乱用だ!

私が再びささやかな反撃をしようと口を開きかけた時、

「キヤー……! 千冬様、本物の千冬様よ……! 」

「ずっとファンでした! 」

「私、お姉様に憧れてこの学園に着たんです! 北九州から! 」

「あの千冬様にご指導いただけるとうれしいです! 」

「私、お姉様のためなら死ぬます! 」

信じられないことに、クラスの半数がきやいきやいと騒いでいる。

ここにはまともな感性を持った人間はいないのか! ?

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か? 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか? 」

これはポーズでなくまじめに言ってるな。ああ、女子のみんながかわいそう。

……なんて思った私は馬鹿でした。

「きゃああああっ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないようにしつけをして！」

「なんだ、これは……？」

私、前世は夜宵、今世はインデックスは混乱中です。

全く、このDMどもが！ このクラスにはマゾばかりだ！

「で？ お前は何を固まっているのだ、バカたれが」

「いや、千冬姉。俺は」

「バアンっ！」

あ、織斑一夏が叩かれた。

でも同情はしないもんね！ これからハーレム状況でぐふぐふ言うようなやつには同情なんかしてやらないもんね！

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「ちふゆといちかは仲がいいんだね」

「織斑先生と呼べっ！」

しゅっ！

と出席簿が空を切る。

ふふーん、簡単には当たってあげないんだよ！

「危ないんだよ、ちふゆ。出席簿の表紙は意外に固いんだよ？」

「すげー……」

ん、織斑一夏に尊敬の目で見られた。なんか悪くないね。

と、そんなこんなでにぎやかなここをおいておいて教室はざわめきはじめている。

「え……？ 織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で唯一『IS』を使えるって言うのも、それが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。変わってほしいなあっ」  
最後の人、期待しすぎだろ。まあ、本人はぜひに変わってくれっ  
顔してるけど……。

ここって本当にIS学園？

あ、ちなみに資料によると、IS学園は、

『ISの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営および  
資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機  
関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務が  
あり』

という、超簡単にいえば『とにかくすごい学園』らしい。

……私が現実逃避してる間もやっぱり教室は騒がしい。

ああ、もう、うるさいったらない！ 私の耳は繊細なんだよ！

あ、チャイムが鳴った。

ショートホームルーム

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはISの基礎知識を半月で覚  
えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。  
いか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事しろ。私の言葉には  
返事しろ」

おお、何という横暴。

でも、ふふーん。私にはインデックスの完全記憶能力があるのだよ  
！ 基礎知識なんぞ今日の車の中で覚えたわ！

「あー……」

私の席のお隣さん、織斑一夏が変な声を出した。

まあ、しょうがない。

「……………」

……説明しよう！

一時間目のIS基礎論授業が終わった。で今は休み時間。

え、分かったのかつて？ 分かるに決まってるじゃないか！ 完全記憶能力バンザイ！

……話がそれました。

織斑一夏以外は全員女子。…学園全体で。

……どうせハーレム作って純情な女の子たちをもてあそぶんでしょ！ ええ、どうせね！

…ちなみに『世界で唯一ISを動かせる男』だから世界的に有名。学園全体が顔を知っている。

……私は知らなくて名前しか知らなかったけど！ くすん、流行に取り残された女子ってこんな気分なんだ。

よいうわけで今このクラスの廊下には 他クラスの女子、二年三年の女子、とほぼ学園の生徒がここに終結している、という状況である。

しかもいつまでたつても誰も織斑一夏に話しかけようとせず、『あなた話しかけなさいよ』『あなたまさか抜け駆けする気じゃないでしょうね』と言った緊張感にあふれた空間になっているようだ。

……世界でISを動かせるのは女子だけ。さらにIS学園はIS二間して授業を行うための学園。

……ということ、この学園には男子に免疫のない女子がたくさんいるのである。

そして、今の状況に至る。

「……ちよつといいか」

ん！？ この空気の中織斑一夏に話しかけるとは、つわもの！

…でもちよつとかわいそうな人が一人。話しかけようとした瞬間だったのか、金魚みたいに口をパクパクさせている。あーあ、かわいそうな金髪縦ロール。

「あ、机貸してもらったポニテ女子」

「だ、誰がポニテ女子だ！」

ぷんすかと怒るポニテ女子。おっと、本音が漏れてしまった。

「だってー、名前知らないんだもん」

「なんだそのしゃべり方は！ 私は篠ノ之箒だ！」

「……箒、落ち着け。で、どうした？」

お、放置されていた織斑一夏が反応した。

ちなみにポニテポニテと連呼しているのは髪型がポニーテールだからである。ちなみに肩下まである上を結んでいるリボンも白い。身長は平均的（私にもその身長わけてー！）で、いつもどこか不機嫌そうなつりあがった眼をしている。

「…廊下でいいか？」

「……………」

織斑一夏はフリーズしている。おのれ、ハーレム男め！ 呪ってやる！

「殺殺殺殺殺……」

ぶつぶつと呟きつつ藁人形と五寸釘をとりだす。

え、どこから取り出したかって？ そりゃ、乙女の秘密の袋からです

「早くしろ」

「お、おう」

織斑一夏が若干引きながら出て行った。廊下にいた女子がすぐにごいて道を開ける。

モーゼか！？ モーゼなのか！？

part 6 (後書き)

スランプですー。

「そういえば」

「何だ？」

「去年、剣道の全国大会で優勝したつてな。おめでとう」

「……………、なんでそんなこと知ってるんだ」

「なんでつて、新聞で見たし……………」

「な、なんで新聞なんか見てるんだ!？」

おのれ、織斑一夏。篝ちゃんの乙女心に気づかないなんて。将来、ハーレムを展開する。絶対。絶対。絶対。……よし、呪い殺そう。

「殺殺殺…呪呪呪呪…死死死……………」

ぐさつぐさつとわら人形に五寸釘を突き刺す。

どうも、遅れましたが現在進行形で織斑一夏を呪っている私 夜宵ことインデックスです。

…え？ インデックスはイギリス聖教だから藁人形なんか持たないつて？

フフフ…甘い！ 私は前、生粋の日本人だったから呪いイコール藁人形+五寸釘の図式が出来上がってるのさ！

もう恒例になっている状況確認。

？二人が教室から出て行く

？私も席を立つ。

？ドアの横に隠れる。

？盗み聞き。

以上（現在進行形で?）。

つんつん、と背中をつつかれる。

「刺刺刺…崇崇崇……………」

無視。

つんつん。

「呪呪呪呪……」

つんつん。

無視。

「殺さ……」

ぐいつと肩を掴まれる。

「なんなんだよ!? 今私は織斑一夏を呪い殺そうとしてるから邪魔しないでほしいんだよ!」

「まあ、なんなのですか!? 代表候補生に向かってその言い方!」  
そこにいたのは、さつき織斑一夏に話しかけようとした金髪縦ロールさんだった。

「なんなのかな? 今私はもう少しで織斑一夏を呪い殺せそうなんだよ!」

しゃーっと威嚇すると縦ロールは、

「そんなことはどうでもいいのでさっさとそこをどいて……」  
キーンコーンカーンコーン。

「あ、チャイムがなったんだよ」

「く……っ」

縦ロールはつんつんしたまま席に戻っていつてしまった。

私から見ても、あの子ツンデレキャラだな。

「 であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によっ

て罰せられ  
ぐうぐう。」

隣の席の奴は、大物。かなりの大物だと思う。

俺 織斑一夏は隣のインデックスを見てそう思った。

だってさ！ こんなところでぐーぐー寝て！ 教科書すら出さずに！

千冬ね…織斑先生に叩かれてもそれでも寝るなんて！ 大物だと思っ！

よし、現実逃避はやめよう。

どかつと積まれた教科書五冊。めくってみても、意味不明な単語の羅列にしか見えない。

俺だけ？ 分からないのは俺だけなのか？

「 であるからに 」

無理！ もう無理！ 分からん！

「 おい、起きろ 」

バシイン！

「 あ…… 」

俺の隣で健やかに眠っていたインデックスが叩かれた。

「 痛い！ なにするんだよちふゆ！ 」

「 私の前で寝るとはいい度胸だ。…ちゃんと理解できているのだからな？ 」

「 当然なんだよ！ 」

「 教科書はどこだ？ 」

「 重かったからかおりの車の中！ 」

織斑せんせーは出席簿を持ち上げる。

「 待った！ 待ったなんだよ！ まだ続きがあるんだよ！ 」

「 ほお 」

「 ちゃーんと覚えてきたからいらないんだよ！ 」

「 ……は？ 」

口に出したのは意外に少なかったがやはり皆そう思っているだとう。うん、多分。

「ほう、ならば教科書の文を暗唱してみろ」

「織斑先生、それは横暴では……」

反論しようとした山田先生をインデックスの澄んだ声が遮った。

「正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、『白騎士事件』によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていった。

ISは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISアーマーから形成されている。その攻撃力、防御力、機動力は非常に高い究極の機動兵器。特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアーや『絶対防御』などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることはほとんどない。ISには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出せる。ハイパーセンサーの採用によって、コンピューターよりも早く思考と判断ができ、実行へと移せる。また

「ストップ。そこまでだ」

千冬ね…ゴホン、織斑先生が遮った。

「知ってはいたが、そこまですはな……」

「…え、どういうことですか!？」

地毛の金髪にややつりあがった青い目の女子が織斑先生にきいた。

織斑先生は、一瞬嫌そうな顔をしてから、

「…完全記憶能力。聞いたことはあるか？」

皆が一斉に首を横に振る。

「完全記憶能力というのはな……一瞬でも見たものを記憶する能力だ。一度みたものは何年たとうが忘れない」

「…てことは……」

「ああ。インデックスは生まれながらの能力の持ち主だ」

そして、あっさりと爆弾を投下した。

part 8 (前書き)

うちのインデックスさんは内面で暴言吐きまくりです(笑)

ああ……、ばらしちゃった。

そんな恨みをこめて私　夜宵ことインデックスは千冬をにらむ。  
むう……徹夜で頑張ったってことにしてくれればよかったのに。目  
立つじゃないか。あの視線の矛先がこっちになるじゃないか。

「で、貴様は？」

そんな視線をあっさりスルーして織斑せんせーは矛先を一夏に向け  
た。

一夏の机には参考書がなく、教科書しかなかった。

「……織斑。参考書はどうした？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パン！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

あーあ、かわいそう。脳細胞がゼロになっちゃうんじゃないだろう  
か。

「あとで再発行してやるから一週間で覚えろ」

「え、一週間であの分厚さは……」

「いいな？」

「……はい」

可哀想なヤツ。

「ちよつと、よろしくて？」

移り変わって二時間目の休み時間。

勇気ある一人の女子が織斑一夏に声をかけた。

その女子とは、

「……あ！ 私にちよつかいかけてきた金髪縦ロール！」

「だ、誰が縦ロールですよ！？」

ちなみいに金髪縦ロール金髪縦ロールと連呼しているが、本名はゼシリア・オルコット。

イギリスの代表候補生である。

資料によると、母親にぺこぺこしている父を見て育ったため、過剰に男子を軽視している傾向がある、だそうだ。

多分織斑一夏に喧嘩を売りにきたんだよねー。うん、分かるよー。のんきに考えている間にどんどん会話が進む。

「わたくしを知らない？ このゼシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補性のわたくしを！？」

あー、ムカつく。なーんかこういう手合いつて、勝負して実力差を見せつけて唾然とさせてやりたいという気持ちがムラムラとしてくる……。

……はっ！ インデックスのキャラから外れてしまったああー！

ぼんやりしている間に三件目開始のチャイムが鳴った。

よし、今決めた。ゼシリア・オルコット。

(チャンスがあれば) お前の幻想をぶち殺す！

えへへ。パクリだけ一回いって見たかったんだ。

キーンコーンカーンコーン。

三時間目開始のチャイムが鳴る。

「それではこの時間は実践で使用する各装備の特性について説明する」

今回は山田先生でなく千冬が教団にたつ。

……ふん！ 思いつきり秘密を暴露してくれたことは忘れてないんだからね！

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

クラス対抗戦？ ……なーんかさっきの宣言を果たせそう！

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみクラス対抗戦は入学時点で各クラスの実力推移を図るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないぞ」

……ふむ。つくづく金髪高飛車縦ロールが食いつきそうな話だ。

「自薦他薦は問わない。他薦されたものには拒否権はないからな」

「はいつ。織斑くんを推薦します！」

……織斑一夏……、つくづく可哀想な男だ。

「私もそれがいいと思います！」

あーあ、逃げ道消えたね。

「お、俺！？」

「織斑。席に着け。邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いらないなら無投票当選だぞ」

「ちよっ、ちよこっ、ちよっと待った！ 俺はそんなのやらな

」

「他薦されたものには拒否権はない。選ばれた以上覚悟しろ」

うおーい、人権無視なのかーあ？

「い、いやでも」

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

バン！ と机をたたいて立ち上がったのはあの金髪高飛車縦ロール。原作知らないけど、原作のイベントなのかな？

part 9 (前書き)

セシリアさんがやたらうざくなった。  
うーん、なぜだろう……？

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表になるだなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

「……うるせエぞ、三下ア」

私 インデックスこと夜宵はけつとそう吐き捨てた。

おっと、いけないいけない。口調がどごぞの白いのになってしまった。インデックスさんはしすたーさまなんだから、丁寧口調丁寧口調。

小さな声で言ったためか、誰も気づいていない。よかったよかった、聞かれてたらめんどくさくなるしね。

「実力からいけばわたくしがクラス代用になるのは必然。それを、物珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS<sup>アイエス</sup>技術の修練に来ているのであって、サーカスをする木は毛頭ありませんわ！」

ぷち。

…やばい堪忍袋の緒が切れそう。あ、一個ちぎれた。

私の脳内のぐるぐるまきにしてある堪忍袋の緒がぷちっ一本ちぎれた。

……つてか、イギリスも島国じゃなかった？

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

ぷちぷち。

やばい、がまんがまん。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはならないこと事態、わたくしにとっては堪え難い苦痛で」

ぷちぷちぷち。

が、がまん……。

「イギリスだつてたいした国自慢ないだろ。世界一まずい料理で万年覇者だよ」

…織斑一夏、よくやった！ これからは信頼の証として一夏と呼んでやるうじゃないか！

「な……っ！」

気づけばセシリアが肩をぶるぶるとふるわせていた。怒髪天をつくなんちゃって。

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」  
ぶちぶちぶちっ！

…あーあ、もうだめ。完っつっつっ全に、キレましたよ。

ゆらりと立ち上がった私を見て、一夏が引く。

「なんなのですか、あなたは！ わたくしは今この猿と話しているのです！」

金髪高飛車ロールがきゃんきゃんとわめく。

……てか、猿って。

「……一つ言わせてもらいたいんだよ。祖国を侮辱しますのとかふざけたことを言っていたが、最初に二本を侮辱したのはセシリアのほうだったんだよ！」

なんかところどころインデックスらしくない部分があったが、気にしないでー。……へこむから。

「な……っ、そういうあなただつて制服も着ていないでしょう！？」

そんなエセ修道服なんて着て！」

「…これは、イギリス聖教第零聖堂区『必要悪の教会』ネセサリウスからもらった正真正銘の修道服なんだよ！」

「わたくしは長年暮らしていましたが、『必要悪の教会』ネセサリウスは何もしていないただのお飾りの」

あー、もう限界。

最後の最後の理性の壁が突破されちゃった。  
だん！

もの凄い音がした。私が机を叩いたのだ。

あるもので。

一拍置いて、机が真つ二つに割れた。

……は!?

いや落ち着け俺、取り乱しちゃダメだ。

そんなこんなで俺　織斑一夏は混乱していた。

状況確認をする。

確か、俺とセシリア・なんとかさんと言い争ってた。うん、これは間違いない。

それから、インデックスが間に入って落ち着かせようとして、でもセシリア・なんとかさんがインデックスが所属しているっていうんなららの教会を貶して、インデックスがぶちギレて……。

うん、ここまででは分かる。

なのに、なんだって俺の横にいるインデックスは　。  
2メートルぐらいある馬鹿長い刀を構えているんだ。

その刀で叩かれた机は真つ二つになっている。

あれー？　おかしいなー？　叩いた時つて鞘に入ったままだったよ  
ねー？

そう聞きたくなるくらい、机は真つ二つにされていた。

インデックスはその馬鹿長い刀を構えたまま静かに言う。

「……私を貶すのはかまわない。けど、『必要悪の教会』<sup>ネセサリウス</sup>は貶さないで。……『必要悪の教会』<sup>ネセサリウス</sup>にはステイルもかおりもいるんだからステイルとかおりって、誰？

静かな口調がなおさら込められた怒りを表しているようで怖かった。

「落ち着け」

「バアン！」

沈黙を破ったのは千冬姉の出席簿だった。

「いつ！」

叩かれたインデックスが悶絶する。

「お前たちの話は置いておいて、とりあえずクラス代表を決める。

オルコットの言う通りならもつとも強い者が代表となるべきだ。：

勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオル

コットはそれぞれ用意をしておけ。それでは授業を始める」

「待った、ちふゆ！」

「織斑先生と呼べ」

「バアン！」

再びインデックスの頭が叩かれる。

「そんなことはどうでもいいんだよ！ 私はその金髪縦ロールを

こてんぱんに伸ばさなきゃ気が済まないの！」

「ダメだ」

「……なら」

インデックスはにやりと笑みを浮かべる。

「私もクラス代表候補に立候補するんだよ！」

「うええっ!？」

驚きのあまり変な声を出してしまった。

「自薦もありなんでしょう？ なら私も勝負に参加できるんだよ！」

「ふむ。……まあ、よしとしよう。インデックスは二人の戦う間寮で待機だ」

「なんで!？」

「一方的に情報を得るのはよくないからな。順番はオルコット対織斑、織斑対インデックス、オルコット対インデックスだ。それでは再び授業を始める」

「…ちなみに、ハンデはどのくらいつけるんだよ？」

「あら、もうお願いですの？」

セシリア・なんとかさんがふんつとせせら笑う。

「何言ってるんの、金髪縦ロール？ 私がどのくらいつけなければいいのかに決まってるんだよ」

「い、インデックスさん、それ本気で言ってるの？」

「代表候補生相手にハンデって……」

みんな本気で笑っている。

「ふうん、ハンデは受け取らないんだね。……本当にいいの？」

「何を言っているのですか？ わたくしはイギリスの代表候補生ですのよ？」

「いいんだ。じゃ、徹底的に叩き潰すよ」

インデックスが手をひらひらと振りながら言う。

「待て。授業を始めると言っているのが聞こえんのか」  
「バアン！ バアン！」

千冬姉が二人の頭を叩いて話を終わらせる。

セシリアがどんだけ強くても、基礎ぐらいはマスターできるし、大丈夫だろ。

つて、セシリアだけじゃなく、インデックスとも戦うのか。

「うっ……」

今、私　　夜宵ことインデックスのとなりで、一夏がうなだれている。

「い、意味が分からん……。なんでこんなにややこしいんだ……」

「えー？　そうかな？　私は簡単だと思うんだよ？」

でも、一夏つてめちゃくちや頭悪いんだねー。このインデックス様が懇切丁寧に一から十まで教えてあげたのに！

「分からんものは分からん……」

…ま、専門単語の集まりだからねー。なんでか私の頭の中にはインブツトラインされてたけど。

神様がやってくれたのかな？　…神様バンザイ！

放課後だというのに相変わらず状況は変わっていない。他クラス、さらには他学年の女子までもが集まって小声で騒いでいる。

いったいなんなのか？　そんなに男って珍しいの？　なんて思う私

……ハーレムだね。そういう私　　っていうかインデックス

も逆ハーレムなのかも。

自覚してるからまだマシだと思いたい。

一夏が学食に移動すると女子がぞろぞろとついてくる。かの有名な参勤交代なの？

しかも再びモーゼの海割り。……一夏つてそんなに珍しいの？

なーんて考えていると、山田先生が来た。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そういつて部屋番号の書かれた紙とキーを一夏に渡す山田先生。

IS学園って全寮制なんだよな！。生徒は全て寮で生活することが義務づけられている。

…そういや私、部屋どこだったけ？

「俺の部屋、決まってるじゃないんじゃないかなかったんですか？ 前に聞いた話だと、一週間は家から通学してもらって話でしたけど」

「そうなんですけどお、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです。……織斑くん、そのあたりのことって政府から聞いてます？」

ん？ 山田先生、甘い。そんな小声で話しても私には聞こえてしま  
うですよ。ふぶん、暴食シスターインデックス様をなめるでない！  
「そういうわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最  
優先したみたいです。一ヶ月もすれば個室のほうが用意できますか  
ら、しばらくは相部屋で我慢してください」

「……あの、山田先生、耳に息が……」

「あ、いやっ、そのっ、別にわざととかではなくてっ……」

ちくせう！ このハーレム鈍感二流フラグメーカーめが！

あ、ちなみになんで二流かというところ……上条さんみたいにかっこよ  
くないから！

……そうだよ！ 私は上条さん大好きっ子だよ！ 悪い！？

…落ち着こう。すーはーすーはー。

ふう、落ち着いた。

「そういえば、まやー」

「はい、なんですか、インデックスさん？」

「いちかって女の子と相部屋なのー？」

「はい、そうですか？」

確認をとってから、一夏を睨む。

「……おんなじ部屋の子に何かしたら、噛み殺す」

えへへー、パクってみた 元ネタ分かったー？

ちなみに私はトンファーじゃなく、純粹に頭蓋を噛み砕くよ

「それじゃー」

手を振って二人と別れる。

えーっと……、私の部屋は……1025号室か。

なんか嫌な予感がするのは気のせいだと思いたい。

がちやり。

部屋のドアを開けてみる。と、そこにいたのは……。

「あれ、ほづき？」

あのポニテ女子、篠ノ之箒さんだった。

「ポニテ女子ではない！」

な、なににい！？ ど、読心術！？ 一体どんな術式を使ったの！？

「ああ、お前が同室なのか。……インデックスと呼んでもいいか？」

「いいんだよ」

部屋を見回してみる。と、

「あれ、ベッドがもう一個あるんだよ」

ベッドが三つあった。

「ああ、そうなんだ。多分、使わないと思うから荷物置き場にして  
いるのだが」

……なんか、嫌な予感がひしひしとするんだよ……。

「それでは、私はシャワーを浴びてもいいか？」

「いいんだよ！」

「それでは、失礼する」

篤はシャワールームに入ってしまった。

「トイレ行く」

なんだかんだでトイレに行けなかったのでトイレに行くことにした。

そして十数分後、

私が目にしたのは、体にタオルを纏っただけの状況の顔を真っ赤にしている篤と、一夏だった。

ピキリ。

「……いちか、私はシスターさまだから遺言を聞いてあげるんだよ」

「ま、待て！ そこには盛大な誤解があっ」

「……噛み殺す！」

私は一夏に飛びかかった。

コンマ1秒後、噛み付かれた一夏の悲鳴が上がった。

part 11 (前書き)

うちのインデックスさんは物まね大好きです。  
いつもにもまして短くてすみません。

「……で？」

私 インデックスは冷たい目で織斑一夏を見据える。

…ふん！ やるかもとは思ってたけど、やっぱりやったんだね！

これだから男ってヤツは！

正座した織斑一夏がおそろおそろ聞いてくる。

「い、インデックスさん、お願いですからそんなゴキブリを見るような目で見ないでください」

「黙れ。今すぐ黙れ。永遠に黙れ。そして死ね」

「ひどくないか!？」

「だから黙れ」

「はい……」

織斑一夏をこびりついた汚れを見るような目で見る。

「で？ ほつき、何があったの？」

「コロッと一転して優しい声で聞く。」

「じじじじ実はだな…… シャワーから上がると目の前に一夏がいて……」

「ふむ」

話を聞くと、織斑一夏の方に向き直る。

そして、

「いいいいいいいいインデックスさん!？ なんなんですか、その恐ろしいものは!？」

釘抜きパールを取り出した。

さらに『歩く教会』からいろいろなものを取り出す。

のこぎり、斧、ドライバー……。

そうです、ミーシャ「クロイツェフ」(? )さんの七つの拷問用具です。

ミーシャさんってかわいいと思うんだよねー、うん。

「うふふふふふ……。ほつきに謝るまで拷問してあげるんだよ……」

「嫌だあああああ！ 箒、ごめんごめんごめんごめん！ 許して！」

ジャンピング土下座をして謝る一夏。ふふん、いい気味。けどジャンピング土下座って上条さんのパクリじゃ……。

「い、一夏分かったから……」

ドン引きしながらいう箒。

「まあ、それは置いといて……この部屋の決まりを……」

「なんで？」

「なっ……」

顔を真っ赤にする箒。と、

「どうした？ 風邪か？」

「制裁っ！」

がぶつと噛み付く私。

「ぎゃあああああああ！」

痛みで絶叫する一夏。

「ちっ。噛み砕けなかったんだよ！」

「なんだそのリアルに怖い言葉！」

「全く、なんなのですか、唐変木。もともと馬鹿だったのが齧ったせいでもっと馬鹿になったのですか？ それなら安心するのです。

お前はもともと頭が悪いから今更頭が悪くなっても変わらないのです」

えへ。ダリアンさんのまねー。インデックス口調もいいけどダリアン口調もいいかも。

「……、箒、すまん。もう一回話してくれ」

「だ、だからな。この部屋の決まりというか、その……なんというのか、く、クラス上での線引きというか……必要だと思ってな」

ごにょごにょと言つ箒。

織斑（ついに呼び捨て！）は何がなんだか分かっていない様子。

……ふん！

「ま、まずシャワーの使用時間だ。インデックスと私は七時から八時。一夏は八時から九時……でいいか？」

「え、俺早い方がいいんだけど……」

鈍感めが！

「鈍感サイテー鈍感今すぐ消滅しろ」

「え、鈍感って俺！？ 消滅は酷いぞ！？」

抗議する織斑。リア充が！

「あれ？ そついえばここって個室にトイレないんだよな？」

「ああ、各階の両端に二カ所あるだけだな」

「それって男子用トイレってあるのか？」

「……」

「……」

「……」

「……俺、どうなの？」

「知らん」

あっさりと答える私。

篝ちゃんの裸を見た馬鹿ものへの嫌がらせなの！

「最悪の場合は女子トイレを使うしかないのか……？」

……は？

こいつは今、なんと言った？

最悪の場合は女子トイレを使うしかないのか……？ 最悪の場合は

女子トイレを使うしかないのか……？

ないのか……ないのか……ないのか……。

はっ！

「変態鈍感二流フラグメーカー女の子泣かせハーレム最低馬鹿アホ野郎今すぐ死ぬ」

「インデックスさん酷い！ しかもなんなのその拷問用具は！？」

なんかキャラがくずれている気がひしひしとする……。

織斑は私 インデックスからじりじりと遠ざかっていく。  
ふん！ 織斑はおとなく私にかじられてればいいんだよ！  
そして部屋の脇のポストンバックに刺さっていた竹刀をみつけ、私  
に迎えて構える。

が。

「なっ……………なっ……………」

箒が震えながら織斑の竹刀を指差している。

「……………え？」

織斑がその竹刀にひっかかっているモノをつまむ。

「かつ、かつ、返せ！」

箒がそのモノを取り返す。

「……………」

じとーっと織斑を睨みつける。

撤回だ！ こいつは変態超鈍感三流フラグメーカー女の子泣かせだ！

「けっ、変態が」

「お、俺は変態じゃない！」

「狂犬病にかかった犬に噛まれて猫に爪でひっかかれて馬に蹴られて海に落ちて死ぬ」

「インデックスさん！ やたらと精密なのが怖いです！」

でもしかし……………と織斑が箒の方を見る。

「ブラジャー、つけるようになったんだな」

「……………ッ！！」

ふしゃーっと怒鳴りながら織斑の頭めがけて跳躍する。

と同時に箒の竹刀が織斑のみぞおちに直撃した。

「なあ……」

「……」

「……」

「なあって、いつまで怒ってるんだよ」

何をとぼけたことを言っているんだ、この唐変木めが。

「怒ってなどいない」

「顔が怒ってるじゃん」

「生まれつきだ」

「ってゆーか、あんなことしておいてほつきに話しかけるなんて最低だと思っただよ」

「あれは事故で」

「「ふん！」」

二人で同時に織斑から顔を背ける。

こんな変態を視界に入れておいたら篝ちゃんの目が腐ってしまっ。ちなみにここは入学式翌日の朝八時。一年寮の食堂である。

食べているのは三人とも和食セット。ご飯に納豆、鮭の切り身とみそ汁。ついでに浅漬け。

これがまた、めちゃくちゃおいしい。何回おかわりしたんだか分かんないほどおかわりしてしまった。

それなのにさっぱり満腹にならないのがインデックススクオリティ。

……太らないよね？

「篤、これうまいな」

「……………」

まあ、あきらめない精神は認めるが。あんなことをしておいて話しかけようだなんてずうずうしい。

「だから怒っていないと言っている」

篤さん、織斑はなーんにも言ってますんよ？ というか私にも読心術教えてー。

「ねえねえ、彼が噂の男子だって！」

「なんでも千冬様の弟らしいわよ！」

「えー、兄弟そろってIS操縦者かー。……やっぱり彼も強いのかな？」

相変わらず女子全員そろっての包囲網。っていうか、他にやることはないのか。

「だから篤」

「名前で呼ぶな」

「……篠ノ之さん」

「……………」

あれ？ 篤、どうしたんだろう？

「お、織斑くんっ、隣いいかな？」

「ああ、別にいいけど」

この鈍感男！

「うわ、織斑くんって朝すごい食べるんだ！」

「お、男の子だねっ」

「俺はよる少なめにとるタイプだから。朝たくさんとらないとき」

いんだよ」

フツーに答える織斑。

ふんっ、余裕だねっ。

「ていうか、女子は朝それだけしか食べなくて平気なのか？  
私の膳をちら見してからという織斑。

「女子にその言葉は禁句タブーなんだよっ！」

そっぴいっつ、織斑の頭を齧る。

「いたたたたたああっ！」

みんなが啞然としている。

が、

「織斑くんって実はMなのっ!？」

「今すぐ原稿の修正しなきゃ！」

腐女子数名。

「ほづき、先に行くんだよ。のんびりするのもいいけど頭叩かれるよ?。」

そう言ってから教室に向かう私。

後ろで慌てて食事を食べる音がする。

よし、大丈夫っぽいな。

手のひらの上のものを見てから、急ぎ足で教室へと向かった。

「 ISにも意識があり、お互いの対話 つまり一緒に過ごした時間で輪k裏合うというか、操縦時間に比例してIS側も操縦者の特性を理解しようとしています」  
ふうつと意識が浮上する。しまった、いつのまにか眠っていたようだ。

昨日夜更かししすぎたかな……。

「それによつて相互的に理解し、より性能を引き出せるようになるわけです。ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

「先生ー、それって彼氏彼女のような感じですかー？」

もう大事な話は終わりみたいだ。

「……いちか、チャイムが鳴ったら起こして」

「へ？ ええ？」

一夏の返事もろくに聞かず、私は再び眠りについた。

part 13 (前書き)

うー……短い……。

再び私 インデックスは眠ろうとしたのだが。

Bannon!

「痛い！ 暴力反対！」

叩かれた。この暴力教師め！

「貴様こそ授業でどうと眠るとはいい度胸だ」

あれ、額に青筋が……。

「インデックスって叩かれてもずっと寝てたしさっきなんか反撃してたぞ」

織斑に教えてもらおう。は、反撃？

一体何をしたのだろうか。七天七刀振り回してたりするかも。……シヤレにならない。

キーンコーンカーンコーン。

「あつ。えっと、次の時間ではISの基本制動をやりますからね」  
授業終了。それから、忠告。

「織斑、貴様は変態で馬鹿で脳みそがさっぱりないと思うんだよ！  
でも天にまします我らの父の教えに従って忠告をあげるんだよ！」

「……え？ へ、変態って!？」

「死ぬ気で逃げろ」

そう伝えると、ダッシュでその場を離れる。と同時に、

「ねえねえ、織斑くんさあー」

「はいはい、質問しつもん！」

「今日のお昼ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

おい、最後の発言はヤバいだろ!？」

「いや、一度に聞かれても……」

と慌てる織斑。人の忠告はちゃんと聞かないとダメなんだよ！

「千冬お姉様って家ではどんな感じなの!？」

「え、案外だらしな」

Bannon!

「休み時間は終わりだ。散れ」

ふーん、なんとかごまかしたけど、だらしないんだ。えへへ、弱み握っちゃったよ。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

お前なの？ ならなんで私だけ貴様なのさ？

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそう  
だ」

「????？」

織斑はさっぱり分かっていない様子。この贅沢ものめ！

ちなみに私も持つてるよー。イギリスの第二世代のISをいただいでいるいる改造……っていうか改良を施したヤツ。

改造って言っても色が変わるとかそんなのー。でも別人のふりするのに役立つんだー。

「インデックス。教科書六ページ」

「え、へ！？ えーと……」 『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術はいつさい開示されていません。現在世界中にあるIS467機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、いまだに博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関ではそれぞれ割り振られたコアを使用し、て研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』

……」

「つまりそういうことだ。本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間にしか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「な、なんとなく……」

あれ？ 私スルー？ ちょっと悲しいよ？ インデックスさん泣いちゃうよ？

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

「そうだ、篠ノ之はあいつの妹だ」

生徒の個人情報ばらしちゃだめだろ。

「ええええーっ！ す、すごい！ このクラス有名人の身内がふたりもいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之先生ってどんな人！？ やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？ 今度ISの操縦教えてよっ……最悪だ。こんな学園、

「なくなっちゃえばいいのに」

誰も、箒を見ていない。

その向こうの束しか見ていない。

話のネタにするために集まって、箒本人を見ていない。

これは、つらい……。

止めようと腰を軽くあげて、

「あの人は関係ない！」

箒の怒鳴り声。教室がシン……と静まり返る。

「大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言っつて箒は窓の外に顔を向ける。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

山田先生も箒の様子が気になるようだったが、さすがに教師なだけあって、すぐに授業を始める。

あとで箒に話しかけよう。箒が孤立してしまう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4704y/>

---

IS <インフィニット・ストラトス> ~禁書目録の転生者~

2011年12月18日11時49分発行